流通科学大学論集―経済・情報・政策編―第 26 巻第 1 号，91-105（2017）

＜資料＞

2016 年における流通科学大生の喫煙行動

Smoking Behavior of UMDS Students in 2016

中島　孝子*

Takako Nakashima

喫煙は多くの場合若年時に開始される習慣である。本論では、大学生の喫煙行動の実態調査を目的として流通科学大生を対象にアンケート調査を行った。喫煙経験率は 46.6%で、大学生を対象とする他の調査結果に比べ高い。家族に喫煙者がいる場合、父がたばこを吸う割合が高い。家族に喫煙者がいないことと喫煙経験の有無は関連せず、喫煙者であることと友達が喫煙することは関連する。最初の 1 本を吸った時期として 17 歳が多い。

キーワード：大学生、喫煙行動、喫煙経験率、最初の 1 本を吸った時期

Ⅰ．はじめに

喫煙という習慣は、多くの場合若年時に開始される。蓑輪他[1]によれば、喫煙という習慣を始めるかどうかは主として 20 歳代前半までの若年者の問題である。実際、中尾他[2]は大学 1、2 年生を対象とする調査結果において、毎日たばこを吸うと回答した喫煙者のうち、18 歳で習慣的喫煙を開始した者が最も多いことを報告している。また、漆坂他[3]や東山他[4]は大学学部生を対象とする調査結果において、喫煙者が初めてたばこを吸った年齢として、20 歳の回答が最も多いことを報告している。

本論は流通科学大生を対象に実施されたアンケート調査の結果である。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の 1 本を吸った時期および現在の喫煙状況など、大学生の喫煙行動を調べることである。

以下に調査および分析結果を要約する。アンケートの回答者の平均年齢は 20.4 歳、喫煙経験者は回答者全体で 46.6%であり、これらの喫煙経験者が「最初の 1 本を吸った時期」は「17 歳」が最も多く、次いで「中学 1 年」、「18 歳」「20 歳」が多い。本調査における喫煙経験率は、2009～2015 年における本学での調査結果[5][6][7][8][9][10][11]（以下、2009 年調査、2010 年調査、2011 年調査、2012 年調査、2013 年調査、2014 年調査、2015 年調査）のうち 2011 年調査を除くものより高く、2011 年調査については同程度である。いくつかの項目を取り出して統計的検定をおこなった

*流通科学大学経済学部、〒651-2188　神戸市西区学園西町 3-1

（2017 年 4 月 5 日受理）

©2017 UMDS Research Association

結果、（1）たばこを吸う家族がいるかどうかと、喫煙経験の有無との間には統計的に有意な関連がない。（2）喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の 1 本を吸った時期との間には統計的に有意な関連がない。一方、（3）喫煙者であることと友達が喫煙することは統計的に有意な関連があるといえる。

以下では、Ⅱ章でアンケート結果の概要を、Ⅲ章で分析および考察を、Ⅳ章でまとめを述べる。

Ⅱ．アンケート結果

アンケートは、大学 1、2 年生を主な対象とする講義の受講者[12]に対して、2016 年 11 月に匿名自記式質問紙調査によっておこなった。質問は全部で 15 問あり、喫煙経験の有無により一部質問が異なる。アンケートの回答用紙を返却した 68 人のうち 58 人分を有効回答として集計および分析対象とした（有効回答率 85.3%）[13]。

有効データ数 58 のうち、男性は 53 人（91.4%）、女性は 5 人（8.6%）である。回答者の平均年齢は 20.4 歳で、2015 年調査（20.4 歳）と同じである。回答者を年齢別にみると、多い順に 20 歳（48.3%）、21 歳（24.1%）、19 歳（15.5%）である。

家族や友達など周囲の喫煙状況について複数回答で質問した結果を表 1 にまとめた。「友達」と回答した者が全体で最多である（69.0%）。家族の中では「父」が吸うと答えた者が最も多い（39.7%）。以下「兄」（17.2%）、「母」（12.1%）の順となる。家族以外では、「友達」の次に「先輩・後輩」（29.3%）が多い。

喫煙経験者は全体の 46.6%で、男女別の内訳は表 2 のとおりである。喫煙経験者とは、アンケート調査日までに 1 回でもたばこを吸ったことがある者である。回答者全体および女性の喫煙経験率は 2015 年調査よりも増加した。一方、男性については、喫煙経験率は 50%から 49.1%にわずかに減少した。

表 1．たばこを吸う家族や友人（複数回答）

	人数	割合（%）
父	23	39.7
母	7	12.1
祖母	2	3.4
祖父	5	8.6
兄	10	17.2
姉	0	0.0
妹	0	0.0
弟	1	1.7
友達	40	69.0
先輩・後輩	17	29.3
先生・指導者	4	6.9
その他	8	13.8
誰も吸わない	1	1.7

表 2. 喫煙経験者の人数と割合

	人数（2016）	割合（2016, %）	割合（2015, %）
全体	27	46.6	33.3
男性	26	49.1	50.0
女性	1	20.0	0.0

喫煙経験者 27 人に対して、「最初の 1 本を吸った時期」について質問した。図 1 を見ると、最初の 1 本を吸った時期として、最も割合が高いのは「17 歳」（18.5%）である。次に「中学 1 年」「18 歳」および「20 歳」である（いずれも 14.8%）。「小学校」、および「21 歳以上」の割合はゼロであった。本調査の喫煙経験者は、最も早い場合で、中学校で最初の 1 本を吸い、毎年 10%弱～20%弱が新たに最初の 1 本を吸った。

同様に、喫煙経験者に対し、最初のたばこを吸ったきっかけを複数回答で尋ねた（表 3）。「友達にすすめられて」が最も多く（44.4%）、次に「興味があった」「なんとなく」（29.6%）が続く。「親にすすめられて」および「兄弟・姉妹にすすめられて」の回答者はゼロであった。

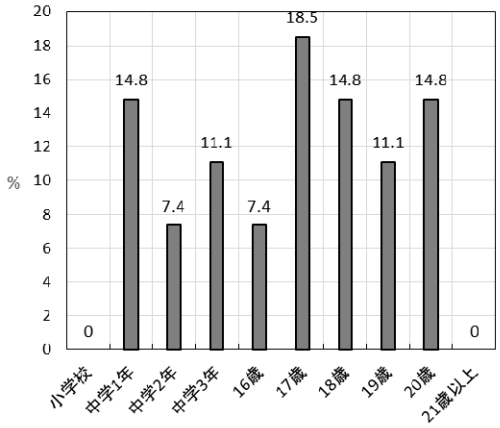

図 1. 最初の 1 本を吸った時期

表 3. 喫煙経験者が最初にたばこを吸ったきっかけ（喫煙経験者）

	人	割合（%）
親にすすめられて	0	0.0
友達にすすめられて	12	44.4
兄弟・姉妹にすすめられて	0	0.0
先輩にすすめられて	3	11.1
興味があった	8	29.6
家にタバコがあった	4	14.8
なんとなく	8	29.6

喫煙経験者に対して、これまで吸った本数をあわせると 100 本を超えるかどうかを尋ねた。これまで吸った本数が 100 本を超えている場合、現在または過去に喫煙が習慣となっている（いた）と解釈できる。表 4 をみると喫煙経験者の 74.1%が「100 本を超える」と答えた。この割合は 2015 年調査よりも 3%程度低い。

喫煙経験者に対して現在の喫煙量を尋ねた（表 5）。最も多いのは、喫煙量が「1 日 11～20 本」である（33.3%）。次に「1 日 1～10 本」（29.6%）、「吸ったことがある程度で習慣ではない」（22.2%）という回答が多い。毎日喫煙している者（カテゴリー1～3）の喫煙経験者に占める割合は 6 割を超える（66.7%）。喫煙量に関する傾向を 2015 年調査と比較すると、喫煙量が「1 日 11～20 本」および「週に数本程度」（カテゴリー2、4）である者の割合が減少し、「1 日 21 本以上」、「1 日 1～10 本」「週に数本程度」「毎日必ずではなく、気が向いた時だけ」（カテゴリー1、3、5、6）である者の割合が増加している。また、「吸ったことがある程度で習慣ではない」（カテゴリー7）の割合はかわらない。

表 4. これまで吸った本数の合計（喫煙経験者）

	人数（2016）	割合（2016, %）	割合（2015, %）
100 本を超える	20	74.1	77.8
100 本を超えない	7	25.9	22.2
合計	27	100	100

表 5. 現在の喫煙量（喫煙経験者）

喫煙量	人数（2016）	割合（2016, %）	割合（2015, %）
1　1 日 21 本以上	1	3.7	0
2　1 日 11～20 本	9	33.3	44.4
3　1 日 1～10 本	8	29.6	22.2
4　週に数本程度	1	3.7	11.1
5　月に数本程度	1	3.7	0
6　毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	1	3.7	0
7　吸ったことがある程度で習慣ではない	6	22.2	22.2
合計	27	100	100

表 6. 喫煙をしない理由（非喫煙者）

喫煙をしない理由（複数回答）	人数（2016）	割合（2016, %）	割合（2015, %）
人の迷惑を考えて	26	70.3	80.0
健康のため	9	24.3	70.0
機会がなかったから	5	13.5	40.0
たばこが嫌い（におい、味）	19	51.4	20.0
たばこの値段が高い・お金がもったいない	22	59.5	5.0
その他	1	2.7	10.0

表 7. 5 年後の予想

	喫煙者			非喫煙者		
	人数（2016）	割合（2016, %）	割合（2015, %）	人数（2016）	割合（2016, %）	割合（2015, %）
5 年後にたばこを吸っている	15	71.4	71.4	1	2.7	0
5 年後にたばこを吸っていない	6	28.6	28.6	36	97.3	100
合計	21	100	100	37	100	100

ここで、回答者を喫煙経験および喫煙量に応じて 2 つのタイプに分ける。1 つは、喫煙量のカテゴリー1～6 に含まれる者である。これを「喫煙者」と定義する。もう 1 つは、喫煙量のカテゴリー7 に含まれる者および喫煙未経験者である。これを「非喫煙者」と定義する。

非喫煙者（合計 37 人）に対して、たばこを吸わない理由を複数回答で尋ねた。最も多いのが「人の迷惑を考えて」（70.3%）、次に多い回答が「たばこの値段が高い・お金がもったいない」（59.5%）であった（表 6）。2015 年調査に比較して「たばこが嫌い（におい、味）」、「たばこの値段が高い・お金がもったいない」の割合が増加し、他は減少している。

回答者全員に対して 2 つの質問をした。1 つは、「5 年後にたばこを吸っているかどうか」、2 つめは喫煙と健康に関する知識についての質問である。

表 7 より、喫煙者は、71.4%が「5 年後にたばこを吸っている」と回答しているのに対し、非喫煙者は、97.3%が「5 年後にたばこを吸っていない」と回答している。2015 年調査と比較すると、「5 年後にたばこを吸っている」と回答した喫煙者の割合は変化しなかった。

喫煙と健康に関する知識として、脳卒中、肺がん、食道がん、胃がん、心筋梗塞、膀胱がんの 6 種類の疾病を挙げ、その中で喫煙者の死亡確率が非喫煙者の 10 倍以上であるものを選ばせた。6 つの疾病のうち死亡確率に 10 倍の差があるのは肺がんと食道がんである[14)]。正しい選択肢を選んだ場合と正しくない選択肢を選ばなかった場合にそれぞれ 1 点を与え、最高得点を 6 点とした。回答者全体の平均点は 3.9 点である。得点分布は 4 点をピークとしている（表 8）。2015 年調査と比較すると、ピークの位置が 5 点から 4 点へ変化し、なだらかな分布となっている。

2010 年 10 月、たばこ消費税が増税された[15)]。増税に伴い、たばこ価格は値上げされ、銘柄にもよるがたばこ 1 箱あたり（20 本入り）で 300 円前後だったものが、およそ 400 円前後となった[16) 17) 18)]。この事実について知っているかどうか尋ねたところ、回答者 58 人のうち、「知っている」が 52 人、「知らない」が 6 人であり、89.7%の者がたばこ価格の値上げについて知っていた。

表 8. 喫煙と健康に関する知識の得点分布（全員）

得点	人数（2016）	割合（2016, %）	割合（2015, %）
1	0	0.0	0
2	9	15.5	7.4
3	11	19.0	11.1
4	18	31.0	25.9
5	15	25.9	55.6
6	5	8.6	0
合計	58	100	100

最後に、仮想的な質問として、たばこ 1 箱（20 本入り）の価格が 200 円、600 円、800 円、1000 円に変化した場合における喫煙量を回答者全員に尋ねた（表 9）。たばこ価格が低い場合（1 箱 200 円）に比較して、600 円、800 円、1000 円と価格が上がっていくにつれて、「吸わない」（カテゴリー7）と答える者が増加する。「1 日 21 本以上」、「1 日 11～20 本」、および「1 日 1～10 本」（カテゴリー1～3）では、価格が上昇するにつれ、回答者数は減少する。

「週に数本程度」（カテゴリー4）の回答者数は、200 円から 600 円にかけて上昇し、それ以降は横ばいとなる。「月に数本程度」（カテゴリー5）の回答者数は価格に係わらず一定である。「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」（カテゴリー6）の回答者数は 600 円のとき低下し、価格の上昇とともに再び増加する。これらの結果は、たばこ価格が仮に 1 箱（20 本）あたり 1000 円まで上昇しても喫煙者はゼロにはならないが、価格の上昇が喫煙者の喫煙量を減少させる可能性を示唆する。

表 9. たばこ価格が変化した場合の喫煙量（全員）

	人数				割合（%）			
	たばこ 1 箱（20 本）の価格				たばこ 1 箱（20 本）の価格			
喫煙量	200 円	600 円	800 円	1000 円	200 円	600 円	800 円	1000 円
1　1 日 21 本以上	2	1	0	0	3.4	1.7	0.0	0.0
2　1 日 11～20 本	11	7	4	3	19.0	12.1	6.9	5.2
3　1 日 1～10 本	7	7	5	3	12.1	12.1	8.6	5.2
4　週に数本程度	1	3	3	3	1.7	5.2	5.2	5.2
5　月に数本程度	1	1	1	1	1.7	1.7	1.7	1.7
6　毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	4	3	4	5	6.9	5.2	6.9	8.6
7　吸わない	32	36	41	43	55.2	62.1	70.7	74.1
合計	58	58	58	58	100	100	100	100

Ⅲ．分析および考察

１．喫煙経験と家族の喫煙状況

喫煙経験の有無別に、家族の喫煙状況について「誰かが吸う」か「誰も吸わない」かに注目し、クロス集計表を作成した（表 10）。家族が「誰も吸わない」ほど喫煙経験がないと予想し、帰無仮説を「喫煙経験と家族に喫煙者がいるかどうかとは関連がない」として、独立性の検定をおこなった。その結果、帰無仮説は棄却されなかった。すなわち、喫煙経験の有無と家族に喫煙者がいるかどうかは関連しているとはいえない（カイ二乗検定、有意水準 0.05）。

表 10．喫煙経験別のたばこを吸う家族（人）

	喫煙経験あり	喫煙経験なし	合計
家族の誰かが吸う	17	14	31
家族は誰も吸わない	10	17	27
合計	27	31	58

２．喫煙経験者における最初の１本を吸った時期と現在の喫煙量

ここでは、喫煙経験者 27 人を喫煙量に応じて 2 タイプに分ける。1 つ目は、喫煙量のカテゴリー 1～3 に含まれ、毎日喫煙している喫煙経験者である。これを「日常的な喫煙者」と定義する（18 人）。2 つ目は、喫煙量のカテゴリー4～7 に含まれ、たまに喫煙をする、または現在は喫煙をしない喫煙経験者である。これを「日常的でない喫煙者」と定義する（9 人）。さらに、最初の 1 本を吸った時期を、「小学校」「中学校（中学 1～3 年）」「高校（16～18 歳）」「高校以降（19 歳以上）」の 4 つに集約する。

日常的な喫煙者および日常的でない喫煙者それぞれについて、最初の 1 本を吸った時期を集計すると表 11 のようになる。本調査における 2 つのタイプの喫煙経験者を比較すると、日常的な喫煙者では「中学校」「高校以降」に、日常的でない喫煙者は「高校」に初めて吸ったことがある者が多い。このことについて、（1）日常的な喫煙者には、中学校という 10 代前半に吸い始めた者と高校以降という比較的最近吸い始めた者がおり、（2）非日常的な喫煙者は高校で初めて吸った者が多い。また、（3）高校で初めて吸った者は、現在は喫煙が日常的なものとなっていない者のほうが多い、と解釈できる。

ここで、現在の喫煙量と最初の 1 本を吸った時期の関係について、帰無仮説を「日常的な喫煙者と日常的でない喫煙者で最初の 1 本を吸った時期は同じ」とし、独立性の検定を行った。カイ二乗検定の結果、帰無仮説は棄却されなかった（有意水準 0.05）。すなわち、日常的な喫煙者と日常的でない喫煙者の最初の一本を吸った時期が異なるとはいえない。

2015 年調査と比較すると、日常的な喫煙者では「小学校」で初めて吸ったものが減少し、「中学校」「高校」および「高校以降」で初めて吸った者が増加した。日常的でない喫煙者では、「高

校」で増加し、「中学校」および「高校以降」で減少し、「小学校」については変化しなかった。

表 11. 最初の 1 本を吸った時期

最初の 1 本を吸った時期	2016				2015	
	日常的な喫煙者（人）	日常的でない喫煙者（人）	日常的な喫煙者（%）	日常的でない喫煙者（%）	日常的な喫煙者（%）	日常的でない喫煙者（%）
小学校	0	0	0.0	0.0	28.6	0.0
中学校	8	1	44.4	11.1	42.9	50.0
高校	4	7	22.3	77.7	14.3	0.0
高校以降	6	1	33.4	11.1	14.3	50.0
合計	18	9	100	100	100	100

３．喫煙経験と友達の喫煙状況

「友達が吸う」か「友達が吸わない」かに注目し、喫煙者・非喫煙者別に、クロス集計表を作成した（表 12）。喫煙者の場合、たばこを吸わない友達がいる者はゼロであるが、非喫煙者では、たばこを吸う友達と吸わない友達がいる者はほぼ半数ずつである。ここでは、喫煙者のほうが非喫煙者よりもたばこを吸う友達がいると予想し、帰無仮説を「喫煙者であることと友達が吸うかどうかとは関連がない」として、独立性の検定をおこなった。その結果、帰無仮説は棄却された。すなわち、喫煙者であることと友達が喫煙することは関連しているといえる（カイ二乗検定、有意水準 0.05）。

表 12. 喫煙経験別のたばこを吸う友達（人）

	喫煙者	非喫煙者	合計
友達が吸う	21	19	40
友達が吸わない	0	18	18
合計	21	37	58

４．喫煙と健康に関する知識

喫煙者と非喫煙者について、喫煙と健康に関する知識についての質問に対する得点の平均値はそれぞれ 4.1 点と 3.8 点である。得点の分布は図 2 のとおりである。得点分布において喫煙者は 4 点、非喫煙者は 5 点をピークとする。本調査における得点分布は、喫煙者については 2015 年調査と同様に単峰型である。ただし、ピークの位置が 5 点から 4 点に変化した。非喫煙者については、2015 年に比較してピークの位置に変化はないが、分布の形状がよりなだらかに変化した。

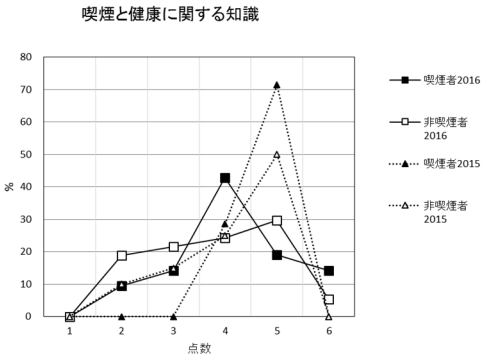

図 2. 知識に関する得点分布

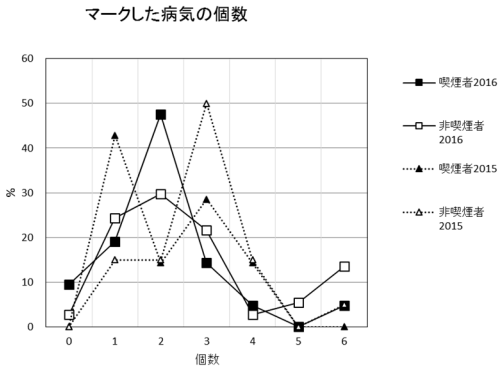

図 3. マークした病気の数

一方、マークした病気の数を比較したところ、図 3 のような分布となった。マークした病気の数が多いほど、その回答者はより多くの病気が喫煙と関連すると考えていると推測される。本調査における喫煙者と非喫煙者がマークした病気の数で最も多いのはいずれも 2 個であり、平均はそれぞれ 2.0 個と 2.7 個である。図 3 において本調査と 2015 年調査の分布を比較すると、本調査において喫煙者がマークした病気の個数の分布は、2015 年調査の 2 峰型から単峰型に変化していることが観察される。非喫煙者の場合には 2015 年調査と比較して、ピークの位置は 3 個から 2 個に変化して、分布が左寄りとなっている。

５．喫煙者の喫煙量と禁煙希望の有無

喫煙者に対して、禁煙希望の有無を尋ねたところ、21 人中 10 人が禁煙を希望し、11 人は希望しないと答えた（表 13）。「1 日 11～20 本」、および「週に数本程度」吸う者（カテゴリー2、4）については、禁煙希望ありの人数が禁煙希望なしよりも多い。また、喫煙者全体に占める禁煙希望者数は、2015 年調査に比較して 42.9%から 47.6%に増加した。

表 13. 喫煙者の喫煙量と禁煙希望の有無（人）

喫煙量	2016		2015	
	禁煙希望あり	なし	あり	なし
1　1 日 21 本以上	0	1	0	0
2　1 日 11～20 本	6	3	1	3
3　1 日 1～10 本	3	5	1	1
4　週に数本程度	1	0	1	0
5　月に数本程度	0	1	0	0
6　毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	0	1	0	0
合計	10	11	3	4

６．喫煙経験者：これまでの喫煙量が 100 本を超える者と超えない者の喫煙量

これまでの喫煙量が 100 本を超えているかどうかは、過去または現在における喫煙習慣の有無を判断する指標である。表 14 を見ると、これまでの喫煙量が 100 本を超える喫煙者については、「1 日 11～20 本」および 「1 日 1～10 本」吸っている者（カテゴリー2、3）が多く、合計で 80%（「1 日 21 本以上」吸っている者（カテゴリー1）も加えると 85%）である。これらの者は現在においても喫煙が習慣となっていると考えられる。しかし、これまでの喫煙量が 100 本を超えていながら「週に数本程度」「月に数本程度」「吸ったことがある程度で習慣ではない」と答えた者（カテゴリー4、5、7）については、かつては喫煙が習慣であったが、現在は、ときおり、あるいはほとんど喫煙しなくなったと解釈できる。

表 14. これまでの喫煙量が 100 本を超える者と超えない者の現在の喫煙量

喫煙量	これまでの喫煙量が 100 本を超える			これまでの喫煙量が 100 本を超えない		
	人数（2016）	割合（2016, %）	割合（2015, %）	人数（2016）	割合（2016, %）	割合（2015, %）
1 1 日 21 本以上	1	5.0	0.0	0	0.0	0
2 1 日 11～20 本	9	45.0	57.1	0	0.0	0
3 1 日 1～10 本	7	35.0	28.6	1	14.3	0
4 週に数本程度	1	5.0	14.3	0	0.0	0
5 月に数本程度	1	5.0	0.0	0	0.0	0
6 毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	0	0.0	0.0	1	14.3	0
7 吸ったことがある程度で習慣ではない	1	5.0	0.0	5	71.4	100.0
合計	20	100.0	100.0	7	100.0	100.0

本調査と 2015 年調査とを比較すると、これまでの喫煙量が 100 本を超える者については、「1 日 21 本以上」、「1 日 1～10 本」、「月に数本程度」、および「吸ったことがある程度で習慣ではない」（カテゴリー1、3、5、7）の割合が増加し、「1 日 11～20 本」、および「週に数本程度」（カテゴリー2、4）の割合が減少した。「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」（カテゴリー6）は変化しなかった。

これまでの喫煙量が 100 本を超えない者については、「吸ったことがある程度で習慣ではない」（カテゴリー7）の割合が 71.4%と最も高い。「1 日 1～10 本」および「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」（カテゴリー3、6）の割合はそれぞれ 14.3 である。これらの者は最近になって日常的に喫煙を始めたが、まだ喫煙量が 100 本を超えていないと解釈できる。しかし、カテゴリー 3 の者については、数か月のうちに喫煙量が 100 本を超えることになると推測される。

７．仮想的なたばこ価格の変化と喫煙経験者の喫煙量

たばこ価格が変化したと仮定した場合の喫煙量を喫煙経験者について集計した（表 15）。回答者全体の場合（表 9）と同様に、喫煙経験者についても、たばこ価格の上昇に伴い「吸わない」（カテゴリー7）という回答が増加する。「1 日 21 本以上」、「1 日 11～20 本」および「1 日 1～10 本」（カテゴリー1～3）では価格の上昇に伴って回答者の割合は減少する。「週に数本程度」および「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」（カテゴリー4、6）については価格の上昇に伴い増加または横ばいであり、「月に数本程度」（カテゴリー5）は一定である。

200 円の場合と現在とで喫煙量を比較すると、価格低下に伴い、「1 日 21 本以上」（カテゴリー1）の割合が増加する一方、「1 日 1～10 本」（カテゴリー3）の割合は減少する。「1 日 11～20 本」「週に数本程度」「月に数本程度」「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」および「吸わない」（カテゴリー2、4、5、6、7）については、変化は見られない。

表 15. たばこ価格が変化した場合の喫煙量（喫煙経験者）

	人数				割合（%）				
	たばこ 1 箱（20 本）の価格				たばこ 1 箱（20 本）の価格				現在の喫煙量（再掲）
喫煙量	200 円	600 円	800 円	1,000 円	200 円	600 円	800 円	1,000 円	
1　1 日 21 本以上	2	1	0	0	7.4	3.7	0.0	0.0	3.7
2　1 日 11～20 本	9	6	4	3	33.3	22.2	14.8	11.1	33.3
3　1 日 1～10 本	7	7	5	3	25.9	25.9	18.5	11.1	29.6
4　週に数本程度	1	2	2	2	3.7	7.4	7.4	7.4	3.7
5　月に数本程度	1	1	1	1	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7
6　毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	1	3	4	5	3.7	11.1	14.8	18.5	3.7
7　吸わない	6	7	11	13	22.2	25.9	40.7	48.1	22.2
合計	27	27	27	27	100	100	100	100	100

８．依存度の比較

本調査では、加濃式社会的ニコチン依存度調査（KTSND）を実施した。この調査は社会的ニコチン依存を評価するもので、30 点満点で 9 点以下が正常範囲とされる。KTSND は喫煙者の心理的な依存を評価するが、喫煙者だけでなく非喫煙者も回答できる [19]。集計の結果、回答者全体の平均点は 13.6 点、喫煙者 17.1 点、非喫煙者 11.5 点であった（表 16）。喫煙者よりも低いものの、非喫煙者の平均点が閾値である 9 点よりも高かった。KTSND は「心理的依存に起因する「誤った思い込み」（認知のゆがみ）を定量化する質問項目から構成」されている [20]。すなわち、本調査では喫煙者だけでなく、非喫煙者の一部も喫煙に対して「誤った思い込み」を持っていることを意味する。このことは、今後、これらの非喫煙者が喫煙を始める可能性を示唆するかもしれない。

表 16. 加濃式社会的ニコチン依存度調査の結果

	平均点
喫煙者	17.1
非喫煙者	11.5
合計	13.6

９．喫煙経験率の比較

回答者全体の喫煙経験率（46.6%）は、2011 年調査と同程度に高い（表 17）。本調査における喫煙経験率を男女別にみると男性 49.1%、女性 20%である。男性の喫煙経験率は、2011 年および 2015 年調査と同程度であり、それ以外の調査（2009、2010、2012、2013、2014 年調査 ）における喫煙経験率と比較して高い。また、本調査における男性の喫煙経験率は中尾他[21]、新井他[22]、東山他[23]、角田他[24]、石川・高橋[25]、原田他[26]および、玉江[27]の調査結果より高い。また、本調査の喫煙経験率では、年齢が上がるほど喫煙経験率も高くなる傾向を必ずしも示さない。このことは、学年が上がると喫煙経験率が上昇する石川・高橋[28]の調査結果と異なる。

表 17. 喫煙経験率の比較

調査の種類	調査の時期	データの属性	全体	男性	女性	回答者数
本調査	2016年11月	大学生（平均年齢 20.4歳）	46.6%	49.1%	20%	58
中島（2016）	2015年5月	大学生（平均年齢 20.4歳）	33.3%	50.0%	0%	27
中島（2015）	2014年4月	大学生（平均年齢 19.4歳）	23.3%	26.8%	8.7%	120
中島（2014）	2013年4月	大学生（平均年齢 19.1歳）	33.0%	37.4%	0%	103
中島（2013）	2012年4月	大学生（平均年齢 19.1歳）	23.5%	27.4%	9.3%	200
中島（2012）	2011年4月	大学生（平均年齢 20.1歳）	46.8%	49.0%	36.4%	62
中島（2011）	2010年4月	大学生（平均年齢 19.1歳）	29.4%	33.8%	13.6%	204
中島（2010）	2009年4月	大学生（平均年齢 19.3歳）	31.6%	35.2%	17.9%	136
中尾他（2007）	2002年4～7月	大学生（平均年齢 19.2歳）		31.9%	6.3%	2590
新井他（2009）	2007年11～12月	大学生（1～4年生）		17.2%	1.9%	459
東山他（2010）	2008年12月-2009年1月	大学生（平均年齢 19.8歳）	15.7%	29.0%	4.4%	337
角田他（2011）	2009年10月	大学3年生（男子学生）		35.0%		157
石川・高橋（2011）	2010年6～9月	大学生1年生		26%	11%	276
石川・高橋（2011）	2010年6～9月	大学生2年生		37%	13%	234
石川・高橋（2011）	2010年6～9月	大学生3年生		39%	14%	116
原田他（2014）	2011年4月	大学1年生（平均年齢 18.6歳）	18.2%	34.1%	11.0%	132
玉江（2014）	2011年12月	大学生		29.9%	2.6%	253

Ⅳ．まとめ

本論は流通科学大生を対象に実施したアンケート調査結果を述べている。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の 1 本を吸った時期および現在の喫煙状況など、大学生の喫煙行動の一端を調べることである。

結果をまとめると、以下のとおりである：（1）喫煙経験率は回答者全体で 46.6%であった。本調査における回答者全体および男性の喫煙経験率は、2009～2015 年調査よりも高いか同程度である。（2）回答者の家族に喫煙者がいる場合、「父」がたばこを吸う割合が最も高い（39.7%）が、「父」がたばこを吸う割合は、家族が「誰も吸わない」割合（46.6%）より低い。また、たばこを吸う家族がいないことと、喫煙経験の有無とは統計的に有意な関連がなかった（有意水準 0.05）。（3）最初の 1 本を吸った時期として最も多いのは「17 歳」である。次に「中学 1 年」「18 歳」、および「20 歳」が多い。（4）喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の 1 本を吸った時期には統計的に有意な関連はなかった（有意水準 0.05）。また、日常的な喫煙者の多くは、「中学校」（44.4%）および「高校以降」（33.4%）で最初の 1 本を吸っている。日常的でない喫煙者は「高校」（77.7%）で最初の 1 本を吸っていると回答した。（5）喫煙者であることと友達が喫煙することは関連しているといえる（有意水準 0.05）。（6）喫煙と健康に関する知識に関して、喫煙者と非喫煙者について得点およびマークした病気の数の分布を比較すると、喫煙者では 4 点、非喫煙者では 5 点をピークとする得点分布である。一方、マークした病気の数の分布は喫煙者、非喫煙者ともに 2 個をピークとする。（7）喫煙者において、禁煙希望ありの者は禁煙希望なしの者より少ないが、両者の数は同程度である。（8）これまでの喫煙本数の合計が 100 本を超えている者ほど、現在の喫煙量において毎日吸っている者が多い。（9）2010 年秋のたばこ税増税に伴うたばこ価格値上げについて、約 9 割の回答者が知っていると答えた。（10）回答者全員に、仮想的なたばこ価格における喫煙量を尋ねたところ、価格が上がるにつれて「毎日吸う」者の割合が減少し、「吸わない」者の割合が増加する傾向にある。

喫煙という習慣を始めるかどうかは主として 20 歳代前半までの若年者の問題である。いくつかの文献[29)30)31)]において、大学入学以降の喫煙開始の抑止が論じられている。その一つの手段として価格がある。しばしば議論されるのが、たばこ税増税を通じてたばこ価格を上げることによって、たばこへの需要あるいは喫煙者を減らす方法である。本調査における仮想的なたばこ価格と喫煙量の関係をみると、たばこ価格の上昇に伴って喫煙量を低下させる者や喫煙しないと回答する者の割合が増加した。尾崎他[32)]は、中高生を対象とする調査をおこない、たばこ価格が上がると喫煙をやめるという回答者が増加することを報告している。同時に、尾崎他[33)]は、過去に実施されてきたたばこ税増税に伴うたばこ価格の上昇が中高生の喫煙行動を抑制したと推測しているが、その効果はあまり大きくなかったかもしれないと結論づけている。他方、東山他[34)]は、喫煙者に対する直接的な質問により、「タバコにかける 1 日の費用は平均 160 円」であり、「タバコにかけられる金額の上限（1 日あたり）（「これ以上になると買う気がしなくなる 1 日の金額」）」は平均 350 円であると報告している[35)]。たばこ価格と大学生あるいは若年者の喫煙行動との関連については、調査の枠組みや方法を含め、検討が必要であると考えられる。

また、本調査とこれまでの調査（2009～2015 年調査）を比較すると、本調査の喫煙経験率は、

全体および男性については 2 番目に高い。今後も喫煙経験率に関する継続的なデータ収集および検討が必要と考えられる。ただし、これまでの調査では、年により回答者数が変動するなど、データの信頼性に懸念がある。データの問題については、今後の課題として調査研究を進めていく必要がある。

謝辞

アンケートに協力してくださった学生のみなさんに感謝します。また、匿名の確認者のコメントに感謝いたします。もちろん、残る誤りは著者のものです。

引用文献、注

1） 簑輪眞澄・尾崎米厚:「若年における喫煙開始がもたらす悪影響」『保健医療科学』54（4）, 2005, 262-277.
2） 中尾理恵子・田原靖昭・石井伸子・門司和彦:「未成年期に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニコチン依存度　―大学生の質問紙調査から―」『保健学研究』20（1）, 2007, 59-65.
3） 漆坂真弓・高梨信吾・阿部緑・工藤誓子・三国谷恵・中村邦彦:「弘前大学学部生の喫煙状況と喫煙に対する意識調査」『日本禁煙学会雑誌』5（4）, 2010, 111-119.
4） 東山明子・津田忠雄・高橋裕子:「大学生の喫煙意識－大学生喫煙者の喫煙実態と喫煙経費限界意識について－」『禁煙科学』3（3）, 2010, 35-40.
5） 中島孝子:「2009 年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・経営情報編』18（2）, 2010, 157-168.
6） 中島孝子:「2010 年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・経営情報編』19（2）, 2011, 121-133.
7） 中島孝子:「2011 年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・経営情報編』20（2）, 2012, 153-167.
8） 中島孝子:「2012 年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・情報・政策編』21（2）, 2013, 151-164.
9） 中島孝子:「2013 年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・情報・政策編』22（2）, 2014, 127-139.
10）中島孝子:「2014 年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・情報・政策編』23（2）, 2015, 141-153.
11）中島孝子:「2015 年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・情報・政策編』24（2）, 2016, 111-124.
12）ただし、カリキュラム変更の初年度であったため、本年度の受講者は 2 年生以上であった。
13）喫煙経験者であるのに喫煙経験のない者を対象とする質問に回答している、などのデータは無効とし分析対象から外した。
14）井伊雅子・大日康史:『医療サービス需要の経済分析』（日本経済新聞社, 2002）.
15）財務省:「たばこ税等の税率及び税収」
（URL: http://www.mof.go.jp/tax_policy/summary/consumption/127.htm, 2010 年 8 月 20 日）
16）All About ニュース「たばこ税増税 1 箱あたり 100 円以上の値上げへ」（2010 年 9 月 8 日）（URL:

http://focus.allabout.co.jp/gm/gc/290785/?from=dailynews.yahoo.co.jp, 2013 年 8 月 31 日取得）

17）財務省:「日本たばこ産業株式会社製紙巻たばこ等の小売定価変更の認可をしました」（2010 年 7 月 16 日）（URL: http://www.mof.go.jp/tab_salt/topics/20100716_press.htm, 2013 年 8 月 31 日取得）

18）財務省:「フィリップ・モリス社及びブリティッシュ・アメリカン・タバコ社製品の小売定価変更の認可をしました」（2010 年 8 月 6 日）（URL: http://www.mof.go.jp/tab_salt/topics/20100806_press.htm, 2013 年 8 月 31 日取得）

19）吉井千春:「ニコチン依存度テストの現在と未来（TDS, FTND, KTSND）（特集 禁煙治療―保険診療の実際）」『治療』 88, No. 10, 2006, 2572-2575.

20）吉井千春:「ニコチン依存度テストの現在と未来（TDS, FTND, KTSND）（特集 禁煙治療―保険診療の実際）」『治療』 88, No. 10 , 2006, 2572-2575.

21）中尾理恵子・田原靖昭・石井伸子・門司和彦:「未成年期に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニコチン依存度 ―大学生の質問紙調査から―」『保健学研究』20（1）, 2007, 59-65.

22）新井信成・上地勝・富樫泰一:「本学学生における喫煙行動および知識・態度に関する調査研究」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』58, 2009, 423-438.

23）東山明子・津田忠雄・高橋裕子:「大学生の喫煙意識－大学生喫煙者の喫煙実態と喫煙経費限界意識について－」『禁煙科学』3（3）, 2010, 35-40.

24）角田英恵・桂敏樹・星野明子・臼井香苗:「男子大学生の喫煙に関連する要因: 喫煙者と非喫煙者の比較から」『 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要: 健康科学: health science』7, 2011, 37-42.

25）石川達也･高橋薫:「大学生の健康観 : 喫煙およびムンプスに対する認識 －日本福祉大学 2010 年アンケート調査からの検討－」『日本福祉大学社会福祉論集』124, 2011, 27-37.

26）原田隆之・笹川智子・高橋稔:「大学生の喫煙支持要因の検討」『日本禁煙学会雑誌』9（2）, 2014, 22-28.

27）玉江和義:「九州地区教員養成系大学学生における喫煙行動の実態およびその関連要因の探索的検討」『教育実践総合センター紀要』31, 2014, 209-218.

28）石川達也・高橋薫:「大学生の健康観 : 喫煙およびムンプスに対する認識－日本福祉大学 2010 年アンケート調査からの検討－」『日本福祉大学社会福祉論集』124, 2011, 27-37.

29）たとえば中尾他を参照（中尾理恵子・田原靖昭・石井伸子・門司和彦:「未成年期に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニコチン依存度－大学生の質問紙調査から－」『保健学研究』20（1）, 2007, 59-65）。

30）中井久美子・高橋裕子・清原康介・苗村郁郎・立身政信・寺尾英夫・吉原正治・杉田義郎・森山敏樹・鎌野寛・盛岡洋史・池谷直樹・辻井啓之・山形然太朗:「全国国立大学法人における喫煙対策調査（2006 年度調査）」『禁煙科学』2（4）, 2008, 9-14.

31）中井久美子・高橋裕子・清原康介:「大学禁煙化プロジェクトにおける喫煙大学生への禁煙支援介入の成果」『禁煙科学』2（4）, 2008, 22-28.

32）尾崎米厚・大井田隆・兼板佳孝:「中高生の喫煙状況と 2010 年のタバコの値上げの影響」『中央調査報』649, 2011, 5723-5727.

33）尾崎米厚・大井田隆・兼板佳孝:「中高生の喫煙状況と 2010 年のタバコの値上げの影響」『中央調査報』649, 2011, 5723-5727.

34）東山明子・津田忠雄・高橋裕子:「大学生の喫煙意識－大学生喫煙者の喫煙実態と喫煙経費限界意識について－」『禁煙科学』3（3）, 2010, 35-40.

35）東山他（2010）の調査が実施された 2008 年は 2010 年のたばこ税増税前であり、増税前のたばこ価格は 1 箱およそ 300 円程度であった（東山明子・津田忠雄・高橋裕子:「大学生の喫煙意識－大学生喫煙者の喫煙実態と喫煙経費限界意識について－」『禁煙科学』3（3）, 2010, 35-40）。